



日本音楽教育学会ニュースレター 第90号

目次

1 学会からのお知らせ

1. 第53回東京大会を終えて.....津田 正之 2
2. 第53回東京大会プロジェクト研究報告.....藤井 康之 3
3. 第53回東京大会院生フォーラムを終えて.....山藤 未由・菅原 成美 3
4. 第17回音楽教育ゼミナール「リサーチ・メソッドを学ぶ」報告
.....伊原小百合・多賀 秀紀 4
5. 韓国音楽教育学会 (KMES) の第53回全国大会参加報告.....金 奎道 5

2 委員会からのお知らせ

1. 編集委員会.....今田 匡彦 6
2. 選挙管理委員会「会長選挙・理事選挙の電子化がスタートします」.....山本 幸正 6
3. 国際交流委員会.....菅 裕 7

3 音楽教育の窓

1. エリザベス女王の葬儀にみる英国の音楽と伝統.....コロンえりか 8

4 会員の声

1. 第17回音楽教育ゼミナール「リサーチ・メソッドを学ぶ」に参加して
.....長井 覚子・北川真里菜 9
2. 第53回東京大会に参加して.....森 薫・平山 裕基・松田愛理子 10
カラニ ニメージャ・尾瀨 千咲 11
3. 第35回 ISME 大会参加記.....疇地 希美 12
4. 第35回 ISME 大会と MISTEC コミッションセミナーに参加して.....近藤 真子 12
5. 日本教育学会第81回大会に参加して.....徳富 健治 12
6. 第22回日本音楽療法学会学術大会参加報告.....杉田 政夫 13
7. 令和4年度全日本音楽教育研究会全国大会山口大会（総合大会）に参加して
.....末石 忠史 13
8. 日本コダーイ協会全国大会 2022 in 東京に参加して.....枝村 美夏 13

5 会員の最新・近刊等紹介..... 14

6 報告

1. 2022年度 日本音楽教育学会 総会.....15
2. 2022年度 日本音楽教育学会 第3回常任理事会.....23
3. 2022年度 日本音楽教育学会 第2回理事会.....24

7 事務局より..... 29

[編集後記]

1 学会からのお知らせ

1. 第53回東京大会を終えて

大会実行委員長 津田 正之

2022年11月5日・6日の両日、国立音楽大学で開催された第53回大会は、多くの皆様のご尽力によって、大きなトラブルもなく盛況のうちに終了することができました。

本大会は、コロナ禍の影響により、一昨年度、昨年度に引き続きオンラインでの開催となりました。残念ながら、銀杏が美しい本学内での開催はかないませんでした。実行委員会企画、プロジェクト研究をはじめ、118件の研究発表（口頭発表、ポスター発表）、16件の共同企画と多数の申込みをいただき、当初の予想を上回る500名の参加者の皆様が、大会を盛り上げてくださいました。

本大会実行委員会企画では、「ジャズを通して考えるこれからの音楽科教育—即興、越境するアメリカ音楽をめぐって—」をテーマに、池田篤氏（ジャズ・サクソ奏者）、志民一成会員（音楽教育学研究者）、高尾隆氏（即興演劇研究者）、花木洸氏（音楽ライター）にご登壇いただきました。本企画では、国立音楽大学ジャズ専修教授の池田篤率いるカルテットによるジャズの演奏を交えながら、第一部は森薫会員、第二部は磯田三津子会員のコーディネートにより、パネリストの方との対話を通して、これからの音楽科教育のあり方について多くの示唆を得ることができました。詳細につきましては、次号の『音楽教育学』で紹介いたします。

本大会では、大会実行委員とテクニカル・チームが、それぞれの担当分野の事前準備を、見直しをもって適切に進めてくださるとともに、臨機応変に対応してくださったことが、大過なく終了できた大きな要因となりました。開催直前、コロナ感染が広まり、学生スタッフや実行委員の担当を大幅に変更せざるを得ない、コロナ感染対策に特段の配慮をしなくてはならない状況に直面しました。その際にも様々な状況を想定しながら見直しをもって担当を見直すとともに、抗原検査キットでの検査を実行委員とテクニカル・チーム、学生スタッフに義務付け、感染予防対策に万全を期しながら、当日の運営を進めました。学生スタッフ、実行委員の皆様が、笑顔で適切に対応していただき、安心して発表に臨むことができました、という感謝の言葉を会員の皆様から寄せていただきました。

終わりにになりましたが、本学会の権藤敦子会長、有本真紀副会長、齊藤忠彦事務局長をはじめとした理事の皆様、貴重な情報をいただいた昨年度の京都大会関係者の皆様、歓迎のご挨拶と素敵な演奏を発信していただいた本学の武田忠善学長、本学の広報、メディアセンター、そして、本大会の実行委員のメンバーである、井上恵理副実行委員長（国立音楽大学）、瀧川淳事務局長（国立音楽大学）、森尻有貴大会事務局長補佐（東京学芸大学）、石川裕司実行委員（東京学芸大学）、磯田三津子実行委員（埼玉大学）、鯨井正子実行委員（国立音楽大学）、酒井美恵子実行委員（国立音楽大学）、鶴岡翔太実行委員（国立音楽大学博士課程研究生）、中地雅之実行委員（東京学芸大学）、長井覚子実行委員（白梅学園短期大学）、森薫実行委員（埼玉大学）、山本由紀子実行委員（白梅学園大学）、テクニカル・チームとして支えてくださった長山弘会員（広島大学附属東雲小学校）、越川徹郎氏（本学にてICTの授業を担当）、さらに、院生フォーラムを企画し実践した院生、お手伝いをしてくれた学生スタッフ、本大会を様々な形でご支援くださった全ての皆様に、心から感謝を申し上げます。ありがとうございます。

2. 第53回東京大会プロジェクト研究報告

藤井 康之 (奈良女子大学)

プロジェクト研究では、「生活の中の音楽と音楽教育 Music in Life History and Music Education—ライフヒストリーとして語られる音楽経験—」と題し、まず高井良健一氏（東京経済大学）の講演「ライフヒストリー／ライフストーリー研究が誘う豊穡な学びの世界」から始まった。高井良氏の講演では、ご自身の音楽経験をライフストーリーとして語りながら（ご自身のフルート演奏付き！）、その語りを歴史的・社会的文脈から分析することによって、ライフヒストリー研究の魅力について具体的にお話いただいた。次に笹野恵理子会員から、本報告の共通の問いである「音楽教師にとって教科アイデンティティを支えるものとはなにか？」が示され、続いて嶋田由美会員からは、戦後期に仙台市を拠点としながら歌唱指導の基盤をつくるとともに、児童文化育成に大きく寄与した曾我道雄先生のライフストーリーが、古山典子・藤井康之会員からは、1970～2000年代にかけて、西日本のX市で音楽教師として自身のキャリアをスタートさせたものの、様々な経験から音楽教師としての生き方だけにとどまらなかった女性教師Aのライフストーリーがそれぞれ報告された。

教師へのインタビュー、とりわけ教師の生き方を丸ごと受け止めることは想像以上に難しいものであった。しかし、その教師の「生きられた経験」に懸命に耳を傾ける中で、自分が長年身につけてきた垢のような先入観にハッと気づかされたり、各々の教師が持つ揺るぎない信念にはその時代、その地域で生きてきたからこそその「理由」があるのだと改めて感じ入った貴重な経験となった。

3. 第53回東京大会院生フォーラムを終えて

山藤 未由 (国立音楽大学大学院生)

菅原 成美 (東京学芸大学大学院生)

今大会の院生フォーラムでは、「音楽教育の研究法を考える」というテーマに基づいて、音楽教育を研究する院生が、興味関心のある研究法についてディスカッションを行いました。当日は最大で院生・学部生24名、学生以外のオブザーバー6名、合わせて30名ほどにご参加いただき、4つのブレイクアウトルームに分かれて進行しました。開催に至るまで、参加人数の確保が課題になっていましたが、先生方のお力を借りて事前申し込みの周知や大会当日のアナウンスもしていただきました。最終的に予想をはるかに上回る多くの方にご参加いただき、活発な議論が重ねられました。

様々な研究法のメリットやデメリットについての意見交換や、研究法そのものについての疑問、研究結果を分析する際のデータ管理、研究を続けていくためのモチベーションに至るまで話は発展し、終始和やかに、そして課題意識への共通点などを発見しながら議論は進められました。研究テーマそのものは異なっても、研究に対する姿勢や疑問に感じていることへの共通項などを見出すことができ、研究法について再考する機会が持てたことは、今後の研究に活かされるのではないかと考えます。今回、担当実行委員として関わってくださった鯨井正子先生、森尻有貴先生はじめ、多くの先生方に沢山の助言をいただきました。また、グループの司会進行および院生フォーラムの内容検討には、小野高子さん（東京学芸大学教職大学院生）、上原美宮さん（埼玉大学教職大学院生）のお二人にも関わっていただきました。そして院生フォーラムに参加していただいた多くの皆様にもこの場を借りて御礼を申し上げます。ありがとうございました。

4. 第17回音楽教育ゼミナール「リサーチ・メソッドを学ぶ」報告

(1) ゼミナール1「ELANを用いたコミュニケーション分析」

ゼミナール実行委員 伊原 小百合

第17回音楽教育ゼミナール「リサーチ・メソッドを学ぶ」は、ゼミナール1・ゼミナール2の2回に分けて開催致しました。ゼミナール1「ELANを用いたコミュニケーション分析」は、2022年8月18日(木)に山本敦先生(早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員)を講師にお招きし、Zoomを用いたオンライン形式にて実施致しました。前半は心理学・認知科学の観点から、科学的に客観的であるとはどのようなことかについての講義がありました。また、ELANそのものには科学的な客観化の手続きはほとんど含まれていないことが踏まえられた上で、ツールとしてのELANがどのように役立つのか、なぜ客観的な知見を生み出すことに繋がるのかについて、山本先生のご研究である「相互行為分析」を例にお話を伺いました。後半はELANの基本的操作について学んだ後、3つのブレイクアウトルームに分かれ、参加者同士でのデータセッション(サンプル動画を見ながらの意見交換)を行いました。グループごとにどのような観点からの分析が可能であるか、実際にアノテーションを入れながら議論をしました。データセッション終了後にはグループごとに報告がなされ、山本先生から分析の視点となり得そうなものについてコメントがありました。最後は分析データを示すために用いられるトランスクリプトについて、代表的な例の紹介があり、今回のデータセッションを踏まえて、実際にトランスクリプトを作成するといった課題が出されました。提出した課題については後日、山本先生からフィードバックが頂戴できるという、大変充実した内容でした。オンライン開催ではありましたが、参加者が発言・交流する場面の多い「密」なセミナーとなりました。

(2) ゼミナール2「調査・統計—データを集める・データを使いこなす—」

ゼミナール実行委員 多賀 秀紀

「第18回音楽教育ゼミナール—リサーチ・メソッドを学ぶ—」の2日目は、去る8月28日、「調査・統計—データを集める・データを使いこなす—」(ゼミナール2)と題して実施されました。ゼミナール1と同じくZoomによるオンラインセミナーの形式をとり、講師にお迎えした太田拓紀先生(滋賀大学教育学部教授)のご指導のもと、午前中はグループワークによる質問紙作成演習、昼休憩をまたいで午後には変数と統計的検定についての講義、そして、統計解析ソフトウェアSPSSを用いたデータ分析演習に34名の参加者が取り組みました。

音楽教育研究においても、質問紙調査や統計の手法はよく用いられます。今回のセミナーでは、質問紙調査の要となる質問文や選択肢の作り方についてhowtoにとどまることなく、考え方の基本に立ち返って学ぶ機会となりました。また、統計についての基本的な概念や用語、取り上げられた統計分析に内在する意味をひとつずつ確認できたことは、参加者にとって大きな収穫であったと思われます。ともすれば、手法や考え方の複雑さから二の足を踏んでしまうこともありますが、明らかにできることとその限界を理解することによって、日頃の教育・研究に統計の手法を取り入れる可能性が拓けたのではないのでしょうか。ベネッセコーポレーションが1998年に実施した調査データを用いた解析ソフト(SPSS)の演習も、音楽教育に携わる者としての実感とリンクさせて考えることができたと同時に、経験値を書き換えたり新たな見方を得たりした参加者も少なくなかったかもしれません。

参加者からは、普段から量的研究に親しんでいる方はもちろん、質的研究に軸足を置く方にとっても、お互いの手法についてよく知り、実際に取り組んでみることで、自身の研究をより豊かにできるのではないかとといった感想が寄せられました。

5. 韓国音楽教育学会 (KMES) の第 53 回全国大会参加報告

国際交流副委員長 金 奎道

2022年8月11日～12日までの2日間、ソウル教育大学にて開催された韓国音楽教育学会第53回全国大会に参加した。大会のテーマは「未来社会を切り拓くための音楽教育の方向」である。

韓国音楽教育学会 (KMES) と日本音楽教育学会 (JMES) は、2002～2003年に姉妹学会の提携を結んで以来、学術交流の一環として日韓音楽教育ワークショップの開催、講演依頼、会員同士の繋がりなど、長年に亘って友好的な関係を築いてきた。しかし、ここ数年は感染症対策のため、両国の人的往来が制限されていた。対面での開催は2019年以来、3年ぶりとなる。

1日目には、韓国音楽教育学会会長から日本音楽教育学会会長への大会招待を受け、会長代理として出席予定だった菅裕国際交流委員長の急病により、代わって参加した国際交流副委員長の私から、学術大会に招待して下さったことへのお礼と、さらに日本音楽教育学会との交流を前向きに捉えていただいていることに対して感謝の意を述べ、簡単な挨拶をした。続いて、権藤会長による招待講演 (Music Education in Japan: The Past, the Present and Challenges for the Future) がパワーポイントの動画で30分ほど再生された。講演では、日本の音楽に焦点を当てて、歴史的な経緯、現在の音楽教育の状況、未来に向けた方向性が紹介された。

そして2日目は、2023年2月18日に開催予定の日韓音楽教育実践交流会のための打ち合わせを韓国音楽教育学会の Kim 会長, Choi 副会長らと行った。凡そ10年ぶりとなる両学会の交流会では、「ICTとこれからの音楽教育」について、幼児教育・初等教育・中等教育・大学教育におけるICT活用の現状と課題などを各校種から1人ずつ発表してはどうか、という提案をいただいた。

ICTの活用は、近年韓国の教育部によって開始された wedorang というデジタル教科書と連動した学習情報共有 SNS サービスから、日々発展を遂げている。Chrome Music Lab による音楽づくり、Padlet を使った世界の民謡鑑賞等、教育現場では、ICT を積極的に取り入れた授業が多様に展開されている。

日本でも、GIGA スクール構想によって、1人1台の端末と高速のインターネット回線が整備されており、音楽教育も大きく変わりつつある。2月の交流会が、最先端の環境で音楽を学んでいる両国の子どもの学びの姿はどう変わるのか、未来に向けた音楽教育の可能性やトランジションについて考察するきっかけの場所になれば幸いである。これからも両学会の交流が深まることを期待する。



写真 韓国音楽教育学会 (KMES) 第 53 回全国大会閉会式を終えて

2 委員会からのお知らせ

1. 編集委員会

編集委員長 今田 匡彦

音楽教育研究のトピックは多岐に渡っています。かつての音楽教育は「西洋音楽」を「歌う」こと、楽器で「弾く」ことをどのように「教える」かの研究に重点が置かれていたかもしれません。翻って今日の音楽教育研究は、音楽そのものの正確な定義がないことを前提に、恐らく過去のどの時代よりも、多角的な視座を持つことが可能です。哲学、言語学、心理学、人類学、社会学、歴史学等の人文科学、ときには自然科学の知見を使用しつつ、音楽教育学の独自性を追求する醍醐味は他の学術分野では体験し得ないものです。とはいうものの、体験を紙幅の限られた研究論文に昇華させるのが容易でないことも事実です。先行研究の精緻な分析から紡がれる文脈、その背景を通して必然的に現れる research question(s)、最適な答えを導くための方法論、最初の設問に対応する結論、これらの基本事項に立ち返ることにより、優れた研究論文が生まれるような気がします。

さて、『音楽教育実践ジャーナル』vol.21 の特集テーマは〈ウェルビーイングと音楽教育〉です。子どもの頃から「音楽」を専門に学んできた音楽家の仕事は、自分の演奏で他者を感動させること、自分の技術を他者に教えること、の2つに限られてきました。このような習慣を身に付けた音楽教員の仕事もまた、特に学校現場では、他の教科のどの教員よりもインサイダー的に機能する危険性を孕みます。〈ウェルビーイング〉という切り口の設定により、間接的なアプローチによる〈万人のための音楽教育〉、〈子どもたちの創造性〉へ貢献するためのさまざまなアイデアが生まれねばならないのです。

2. 選挙管理委員会「会長選挙・理事選挙の電子化がスタートします」

選挙管理委員長 山本 幸正

2023年度に実施される第26期会長選挙・理事選挙からいよいよ電子投票システムが導入されます。

2021年度に実施された第25期会長・理事選挙（第25期選挙管理委員会・高木夏奈子委員長）は、〈3密〉による感染が懸念されたものの、選挙公報・投票用紙の発送作業、開票作業を、スペースの限られた部屋で行わざるを得ませんでした。そして26期への申し送りのひとつに「選挙の電子化」が掲げられました。

2022年4月、榎藤会長、有本副会長、齊藤事務局長の新体制がスタートするにあたり、第25期選挙管理委員会の提言を積極的に取り上げていただき、選挙電子化ワーキンググループが結成され、齊藤事務局長を座長として、木村常任理事、菅常任理事、選管から市川副委員長、山本の5名で、電子投票システムのしくみや業者情報、他学会の導入状況、導入に伴う問題や課題、予算措置、そして学会細則および選挙管理委員会規定、会長・理事選挙実施要領の改正、選挙実施スケジュール等々について検討を重ね、常任理事会、理事会を経て、11月5日の総会での承認をいただくことができました。

電子投票の方法の詳細は、今後業者と詰めていく必要がありますが、おおよそ次のような方法になります。投票ログインへのリンク（学会HPに掲載予定）から投票ログイン画面へ進み、個別に送られてきた固有のパスワード（Z型はがきを利用）を入力し、表示された被選挙人一覧から選択する形で投票を行います。何らかの事情で電子投票ができない場合は、パスワードが記載されたはがきを開かずして学会事務局に郵送し、折り返し送られてきた投票用紙に記入し、封入・投函します。

投票は2023年6月の予定です。今後、ニュースレター等で、電子投票の詳細についてお知らせして参ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

3. 国際交流委員会

国際交流委員長 菅 裕

(1) 日韓音楽教育実践交流会「ICT とこれからの音楽教育」開催のお知らせ

日本と韓国で音楽教育実践に取り組む小・中・高等学校・大学の教員による、特にICT活用に関する実践について報告を中心に、今後の日韓の音楽教育の発展のための情報交換・共有をはかります。

開催日時：2023年2月18日（土曜日）14：00～18：00

開催方法：Zoomによるオンライン

情報提供者：

- | | |
|-----------------|---|
| ①幼児教育における実践報告 | 仲条 幸一（つくば国際短期大学／筑波大学大学院）
ユ・ウンスク（ペクソク芸術大学校） |
| ②小学校における実践報告 | 小梨 貴弘（埼玉県戸田市立戸田東小学校）
チェ・ミソル（ソウルヨンド初等学校） |
| ③中・高等学校における実践報告 | 齊藤 貴文（北海道教育大学附属釧路義務教育学校後期課程）
キム・ギョンテ（国楽高等学校） |
| ④大学における実践報告 | 酒井 勇也（宮崎大学）
クオン・スミ（韓国教員大学校） |

参加費：1,000円

※参加申し込み等詳細については、下記Webサイトをご覧ください。

<https://onl.bz/2KYbKUE>



(2) APSMER2023 ソウル大会 Web サイト開設のお知らせ

2023年8月9～11日、韓国ソウル市において、「第14回アジア太平洋音楽教育研究シンポジウム2023 ソウル大会」が開催されます。前回の東京大会（オンライン）では、日本からも多数の発表者が参加しました。この機会に、日頃の研究の成果を海外に発信することを考えてみてはいかがでしょうか。

今後の重要な日程は次の通りです。

2022年	11月28日	発表受付開始
2023年	2月27日	発表要旨締切
	4月30日	参加受付開始
	5月15日	オンライン早期申込割引参加受付締切
	6月30日	オンライン参加受付締切
	8月9日	チェックイン受付
	8月10～11日	大会

詳しくは下記Webサイトをご確認ください。

apsmer.kr



3 音楽教育の窓

1. エリザベス女王の葬儀にみる英国の音楽と伝統

コロン えりか (ホワイトハンドコーラス NIPPON 芸術監督)

2022年9月19日、世界が注目する中、エリザベス二世の葬儀がウエストミンスター寺院にて執り行われました。70年間英国国王として君臨した女王への感謝と鎮魂の祈りは、バグパイブの音色、トランペットのファンファーレ、オルガンと合唱の響きの中で誇りと希望に昇華され、どんな言葉よりも人々を勇気づける強い力となりました。

歴史的な葬儀で捧げられた曲目は、英国出身のヴォーン・ウィリアムスの《ロマンサ》(交響曲5番より)や、エルガーの《オルガン・ソナタ》(Op.28)、女王の結婚式でも歌われた讃美歌“Lord is my Shepherd”を含め、ウエストミンスター寺院聖歌隊のマイスター、ジェームス・オドネルによって入念に選ばれました。英国には今でも聖歌隊学校の豊かな伝統が残っていますが、ウエストミンスター寺院聖歌隊の場合は8歳から聖歌隊学校に入り、フルタイムで24名の少年が、12名のレイ・ヴィカーと呼ばれる大人の聖歌隊員から特別な音楽訓練を受けます。この伝統は14世紀ごろから始まり、ウエストミンスター寺院聖歌隊にはヘンリー・パーセルやウィリアム・バードも在籍したというので、すから、どれほどの長い伝統を受け継いでいるかがわかります。

私も英国王立音楽院在籍中、ロンドン市内のカトリック教会で教会付歌手の仕事で2年間経験しました。クイーンズ・イングリッシュで歌えるようになるまで随分鍛えられ、週ごとの典礼に合わせてハイドン、モーツァルト、バッハをはじめとするミサ曲やカンタータのソロを必死で勉強しました。厳しい世界ではありましたが、音楽に従事する人々には学生であっても敬意を示す文化が残っており、音楽への誇りと愛は、音楽の担い手を支える層の厚さにも現れていました。今でも忘れられないエピソードは、ソリストとして田舎町の合唱団と共演した時のことです。90歳の老紳士が杖をつきながら《メサイア》を全て暗譜で歌っているのです。話しかけると「私は70年以上毎年この教会でメサイアを歌ってきたんだ。このスコアのどんな音だって頭に入っている」と言われました。私は楽譜を持って歌っているのが恥ずかしくなりました。アマチュアで合唱を続け、結婚、就職、引退を経て毎年《メサイア》に戻ってくるこの老紳士の姿に、本当の文化の力を見たようで深く感動したものでした。

“God save the Queen”で始まった葬儀は、チャールズ国王の即位に合わせて“God save the King”で締め括られ、ロイヤルオペラハウスの赤いバルベットのカーテンに刺繍された“E II R”(Elizabeth II Regina)の紋章は、“C III R”(Charles III Rex)に代わりました。一つの時代が終わった寂しさや、そこに属する者たちの誇り、亡き女王の後の時代への不安が入り混じった瞬間も、音楽は見事に人々の心を繋ぎました。音楽は伝統の中で命の再生を繰り返しますが、それは螺旋状に続く一種の記憶装置でもあります。女王の葬儀で捧げられた音楽は精神的な拠り所となり、記憶され、これからも新たなチャプターの記憶を載せながら歌い継がれていくことでしょう。天国の門で、輝かしい顔で女王を迎えているであろう音楽家たちにも心を馳せながら、ご冥福を祈りたいと思います。

4 会員の声

1. 第17回音楽教育ゼミナール「リサーチ・メソッドを学ぶ」に参加して

(1) ゼミナール1「ELANを用いたコミュニケーション分析」に参加して

長井 覚子 (白梅学園短期大学)

この2年ほどELANを分析ツールとした共同研究に関わっており、ELANの活用方法について深めたいという思いからゼミナールに参加させていただきました。講師である山本敦先生におかれましては、長時間にわたって丁寧なご指導をいただいたことに心より感謝申し上げます。

当日は「観察における客観性とは何か」という前提論からお話をいただき、改めて身の引き締まる思いでした。その中でELANができること、できないことをしっかりと認識した上で利用することが大切であると感じました（「ELANは「動画に同期した高機能メモ帳」であって、研究知見を生成してはくれない」という言葉が印象的でした）。ELAN操作の実践や動画データを用いてのデータセッションの後、最後にトランスクリプトの作成方法や事例についてご紹介いただきました。研究の目的・内容に合わせたトランスクリプトの作成方法、音楽行為の様相を如何にそこに表現するかということについては今回、是非とも学んでみたかったことの一つでした。ただ、「身体的振る舞いについてのトランスクリプションは分析の目的に応じて様々な方法が考案・工夫されている」途上とのことでしたので、どのようなトランスクリプトを作成するかについてそれぞれが「格闘」することが肝要であり、それが研究のオリジナリティに繋がるものであること、コミュニケーションな音楽行為場面を扱う音楽教育研究分野から他分野へ提案・貢献できる余地もあるのではないかという可能性を感じました。

第2日の「調査・統計：データを集める・データを使いこなす」は、校務のため参加できなかったことを大変残念に思っております。学生として教育を受ける場を離れて久しい身としては、情報アップデートの機会として、今後も定期的にこのような場を設けていただけることを期待しております。

(2) ゼミナール2「調査・統計—データを集める・データを使いこなす—」に参加して

北川 真里菜 (和歌山大学教職大学院生・和歌山大学教育学部附属小学校)

研究を進めるにあたって必要となる統計的な分析手法について学びたいという思いから、本ゼミナールに参加させていただきました。

ゼミナール2では、太田拓紀先生より統計的検定の基本的な考え方をご教示いただき、質問紙調査の作成演習、統計解析ソフトSPSSを用いた分析演習を行いました。

前半に、変数の種類や関係性、サンプリングの原則など統計学の基礎基本を網羅し丁寧に説明してくださったことで、大変理解しやすく後半の演習に取り組みやすくなりました。質問紙調査の作成演習では、ご参加の皆様とのグループワークを通して、研究仮説の検証に向けて質問紙作成段階から変数を意識しておくなど、質問文・選択肢の作成の手順や留意点について学ぶことができました。また、統計分析演習では、変数の組合せに応じた検定方法（ χ^2 検定・t検定・分散分析）を実践的に学ぶことができ、分析の手順のみならず、分析によって出された結果の読み方や記述例についてもご指導いただけたことが大変勉強になりました。

客観性や実証性の高さ、一般化が可能である等の統計的分析の利点を生かし、本ゼミナールでの学びを早速自身の研究に役立てていきたいと思っております。大変充実した学びの機会を与えてくださったことに、心より感謝申し上げます。

2. 第53回東京大会に参加して

森 薫 (埼玉大学)

今大会では実行委員会の一員として、1日目の実行委員企画・司会と、2日目のモデレータ等を務めました。オンライン大会の裏方のお仕事は特有の不安と緊張感をともなうものでしたが、意外にもコミュニケーションのぬくもりに触れる場面が多くありました。各分科会では、司会の先生方がサポートタイプに発表者への手助けや議論の場づくりをされていました。またある共同企画では、ブレイクアウトルームでの話し合いがありましたが、初めて会う参加者同士が、協力し合ってよりよい討議の時間にしようとして心を砕いているのを感じました。オンラインによる研究活動を重ねるうちに、デジタルな画面越しにアナログなあたたかさを届け合う技術を、私たちは培ってきたのかもしれませんが。対面開催を待ちわびる気持ちは変わりませんが、そのあたたかさを噛みしめた2日間でもありました。最後に、きめ細かなご準備と当日の運営をしてくださった事務局の先生方、スムーズにモデレータ業務を務めてくださった国立音大の学生さんたちに、心より感謝申し上げます。

平山 裕基 (広島文教大学)

今大会では、共同企画VI (デモンストレーション) の「遠隔地をつなぐ音楽表現活動の可能性 (2) —リアルタイム型の遠隔協働音楽制作の実演と実践からの考察—」に発表者として参加させていただきました。2020年より世界中に拡大した新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響によって、それまでの私たちの日常生活は一変し、教育現場のみならず、本学会も含め、さまざまなイベント等でのオンライン化が進みました。音楽教育に携わる多くの先生方が、コロナ禍と向き合い、試行錯誤を重ね、これまでの当たり前が通用しない状況下で、日々、音楽教育実践の在り方を探究されていることを実感します。今回のデモンストレーションにおいても、今までの常識にとらわれない、オンラインの利点を活かした多様な人との繋がりを再認識し、今後さらに遠隔地をつなぐ協働的な音楽学習、音楽表現活動の発展に向けて新たな可能性を感じることができました。

松田 愛理子 (大阪教育大学附属特別支援学校)

本年9月に国連から日本政府に「インクルーシブ教育の権利を保証すべき」との勧告が出たとのニュースが記憶に新しい今、「交流及び共同学習」の実施率の高い音楽科教育において、「ダイバーシティ&インクルージョン」をテーマに、様々な研究や実践を拝見できたことはとても意義のあるものであったと感じています。コロナ禍という制限のある中、工夫を凝らした実践や研究をされている先生方が多く、翌日の授業から早速取り組みたいと思えるものが沢山ありました。

特に大会2日目に視聴させていただいた手歌に関する共同企画では、ワークショップの中で手歌に挑戦し、画面越しではありますが、多くの会員の皆様と共に演奏し、感動を共有することができたと感じています。どのような状況でも、どんな人でも、共に演奏できるということを強く実感しました。

この第53回大会をきっかけに、共に遊び、共に奏で、共に感じ、共に成長できる、そんな音楽科教育へと更に発展していくことを願っています。

カラニ ニメージャ (岐阜大学大学院生)

外国の学会で自分の研究を発表することは、私の人生の夢の1つでした。このたび私は、国際レベルで私の国スリランカを代表して本学会に参加できただけでなく、私の研究を発表することができました。これは私にとって素晴らしい体験となりました。

私たち留学生は、生活の中で多くの課題、特に言語の問題に直面しています。しかし、私には、岐阜大の教授と友人達という、いつも私をサポートしてくれる巨大なチームがあります。彼らの助けもあり、私は学会において日本語で研究を発表し、私の考えを皆さんに伝えることができました。大変嬉しく思っています。

また、私はこの学会に参加することで、様々な興味深い研究について聞くことができ、新たな知識を得ることができました。この経験から、私はさらに自信をもって別の学会にも参加したいと思うようになりました。この場を借りて、参加の機会を与えてくださった日本音楽教育学会に感謝いたします。ありがとうございました。

尾瀨 千咲 (広島大学大学院生)

昨年、一昨年に引き続きオンライン開催となった本大会では、対面での肌感を伴った交流ができない寂しさを覚えながらも、全国各地からオンラインで参加されたそれぞれの先生方とのつながりのなかで、学びが広がってゆく気風を感じました。

私は研究発表に加えて院生フォーラムに参加させていただきました。院生フォーラムでは、研究発表という成果に至るまでのプロセスにおける困りごとや「あるある」を参加者間で共有し、お互いの研究を進めるためのヒントを得ることができました。文献収集やレビューの方法、特に海外文献の読み方についてなど、具体的な局面での悩みや解決案を共有することで、「自分だけじゃない」という安心と研究について語り合う楽しさを感じ、そして、より深い探究に貢献したいという士気が高まりました。つながりを大切にしながらより精進したい、と感じさせられた大会となりました。



写真 第53回東京大会 オンライン本部の様子 (国立音楽大学)

3. 第35回 ISME 大会参加記

疇地 希美 (同朋大学)

2022年のISME大会は7月17～22日、オンラインで開催されました。この時期は、学期末の通常の業務に加え、第7波を迎えたコロナ対応に忙しく、オンラインによる1日4時間ずつの3部制の国際会議へ参加はなかなかの試練（パフォーマンス発表の映像と音楽は癒し）でした。そんな状況で、落ち着いて多くの発表を聞くには至りませんでした。印象に残った発表に、アフガニスタンの若い音楽家を追いかけたフィールドワーク研究と、インドの幼稚園で行われたICTを活用した音楽表現活動があります。コロナの影響はやはり大きく、研究のICT化を推し進め、Zoom会議を利用したインタビューやiPadを活用した幼児音楽教育の実際を知ることができました。それと同時に、政治的にも経済的にもそれらを行える環境が整っていること、音楽を当たり前 enjoyment できることへの感謝を改めて実感させられた大会となりました。

4. 第35回 ISME 大会と MISTEC コミッションセミナーに参加して

近藤 真子 (文教大学)

“Good morning/afternoon/evening, everyone!” ではじまった ISME 2022。世界時間のプログラムと格闘しながら参加した。発表は事前に動画を提出する形で行われ、私は世界大会で、ワークショップ動画を3人の先生方(高橋詩穂・中島千晴・平野次郎)と作成した。いかに動画のワークショップを Hands-On で楽しんでもらえるかがカギとなる。試行錯誤の連続だった。「やってみなくちゃわからない!」と、各自が離れた場所から Zoom に入り、大胆なジェスチャーで架空の参加者に語りかけ、盛り上げた。そして“Ready go!”の合図で一斉に即興音楽づくりを行った。考えてみれば、一人で画面に向かって大騒ぎしているわけだから滑稽なはずだが、我々は真剣そのもの。むしろ、やっている間に皆が繋がっているような気分さえ楽しめた。MISTEC セミナーでは、ポスター発表をした。ディスカッションが活発で、テクノロジーを駆使した研究が多かった。オンライン・リアルタイム型・協働的音楽づくりも体験でき、全てが私にとって忘れられない貴重な経験で、大変勉強になった。

5. 日本教育学会第81回大会に参加して

徳富 健治 (東京学芸大学附属竹早小学校)

今回の日本教育学会第81回大会(2022年8月24, 26, 27日)への参加は、音楽科教育から教科教育共通の普遍的課題を発見する機会となりました。私は、民族音楽学の理論を援用して音楽における「響き」の捉え方を明らかにし、音楽科教育において「子どもが音楽の響きを感じ取る」ことによる教育的効果を提示することを試みた発表をしました。音楽科教育の専門家のみならず、理科教育、社会科教育、および体育科教育等の専門家とのディスカッションを通して、他の教科研究で生み出された理論を音楽科教育に適用できる可能性を発見しました。また、教師が音楽の響きを感じ取る子どもを観察しようするとき直面する心身二元論の問題は、実のところ他教科にも存在する課題であることが判明しました。

本大会の口頭発表においては、多くの発表者が、現行の教師の常識や幅広く展開されている教育政策に対して批判的に検討し、カリキュラム内に存在する論理矛盾を見つけ出し、修正のための提言を行っている姿勢が伺えました。この研究大会を通して、学術が社会へ貢献する一つの在り方を感じ取ることができました。

6. 第22回日本音楽療法学会学術大会参加報告

杉田 政夫 (福島大学)

去る2022年9月16日～18日、広島平和記念公園内の国際会議場にて、第22回日本音楽療法学会学術大会が開催された。テーマは「コミュニティでの共生を支える～音楽療法の役割を考える～」であり、コミュニティ音楽療法 (CoMT) に焦点が当てられた。基調講演は CoMT の国際的リーダー、ブリュンコルフ・スティーゲ氏がつとめ、同音楽療法の諸特性や社会正義、人権との関係性が仔細に論じられた。氏は音楽教育哲学にも造詣が深く、講演のキーワード「芸術的市民権」の概念は、エリオットやウッドフォードの議論を踏まえて彫琢されたものであった。講演を受けての大会企画シンポジウム「コミュニティでの音楽療法を考える」では、指定討論者を担当する機会に恵まれた。話題提供者からは、省察的で文化的脈絡を大切にしたい震災後の音楽実践や、先駆的で生態学的広がりのある多職種連携の事例が示され、CoMT 理論やデリダの正義論に立脚した分析を試みた。講習会や口頭発表、自主シンポジウムにおいても CoMT が扱われ、音楽教育とも親和性の高い同音楽療法への理解が、相当程度進んだものと思慮する。ノルウェーでは毎年、音楽教育と音楽療法の研究者が一堂に会し、議論する伝統があるという。日本でもその様な場を設定できたら、と考えた次第である。

7. 令和4年度全日本音楽教育研究会全国大会山口大会 (総合大会) に参加して

末石 忠史 (東京都立大森高等学校)

11月1日 (火) ～2日 (水) に全日本音楽教育研究会全国大会山口大会が開催されました。二日間の大会では、山口県の先生方の御尽力もあり、公開授業や研究協議、ワークショップ、記念講演、記念演奏などが3年ぶりに対面形式で実施され、とても活気のある大会となりました。

本大会では「楽しむっちゃ！音楽～響きあおう 感動のきずなで～」をテーマに、「子供の音楽的な見方・考え方を働かせた活動を園・校種・学年を越えてつなげることができれば、一人ひとりの子どもの音楽的な資質・能力の一層の向上に寄与できるのではないか」という仮説を立て研究されていました。この研究の初期段階では、音楽を感じ取る幼児やその幼児のもつ感性を引き出す教師の指導力に着目し、これを基に各校種間の接続の重要性を確認しました。そのねらいの大切さは、記念演奏での幼児たちのあたたかで自然な歌声が証明してくれ、歌を聴きながら「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる」ことの意味を深く考えさせられる時間となりました。

8. 日本コダライ協会全国大会 2022 in 東京に参加して

枝村 美夏 (金城大学)

8月20日、21日にかけて「日本コダライ協会全国大会 2022」がオンライン開催された。全12講座は開講時間の重なりがなく、全て受講することができた。講師は、ネメシュ・ラースロー氏、マイケル・ブラッドショー氏、榎田光代氏、藤山和可氏の4名で、海外講座は同時通訳された。海外講座は3つのレベルのミュージシャンシップ、アクティブ・リスニング (教授法)、合唱から成り、例えば合唱講座では、対位法をテーマに、わかりやすくかつ専門的に、分析的に、歌うことを通して学んだ。録音された先生の歌声に合わせて対旋律を歌うのが、オンラインでもハーモニーを味わうことができ楽しい。日本人講師による講座では、乳幼児から小学校まで、わらべうたによる音楽教育を日本の教育現場でどのように実践できるのか、説得力のある実践報告により具体的に系統的に提示された。全講座、多種多様な教育現場で応用可能な内容であった。また、後日の動画配信により何度も視聴でき、聞き逃していたところを復習できるのもありがたい。新学期の授業準備に向けて、大変参考になった。

5 会員の新刊・近刊等紹介

★光平 有希編著『ポップなジャポニカ、五線譜に舞うー19～20世紀初頭の西洋音楽で描かれた日本ー』 臨川書店 2022/3/31 A5判・306頁 ISBN: 978-4-653-04535-9 [本体3,600円+税]
日本を題材にしたシートミュージック（西洋で出版されたピアノや歌による小品楽譜）の足跡を目錄風に辿る。

★浜中 康子著『舞曲は踊るーバッハを弾くためのバロック・ダンス入門ー』 音楽之友社 2022/4/22 A5判・200頁 ISBN: 978-4-276-25082-6 C1073 [本体2,200円+税]
実際に踊り、演奏し、感じ、考えた舞曲の世界。現存する舞踏譜からアプローチし、16種類のバロック舞曲を解説。バロック・ダンスから学ぶ演奏へのヒントを導く。QRコードからステップの実演や公演動画を視聴できる。

★小梨 貴弘・齊藤 貴文・中島 千晴・中原 真吾・松長 誠・渡辺 景子・板橋 薫・今井 由喜著『音楽の授業でタブレット端末をどう使う？』 音楽之友社 2022/10/26 B5判・128頁 ISBN: 978-4-276-32177-9 [本体2,000円+税]
ICTの実践を進める全国の小・中学校の教師による、音楽の授業でのタブレット端末活用事例を紹介した実践書。GIGAスクール構想で導入された最新ツールの、音楽授業での活用の在り方を模索する。

ニュースレターでは「会員の新刊・近刊等紹介」「会員の声」への皆様のご投稿をお待ちしております。書籍、CD、DVDなどのリリースの情報がありましたら、基本的な書籍情報、音源情報に加えて「である調」90字程度の紹介文をお送りください。

投稿先アドレス☞(半角)onkyoiku@remus.dti.ne.jp



6 報告

1. 2022年度 日本音楽教育学会 総会

日 時：2022年11月5日（土）16：00～17：00

会 場：オンライン開催（Zoom）

開会に先立ち、齊藤忠彦事務局長より、出席者97名、委任状268通、合計365名であることが報告された。会則第13条に基づき、正会員総数（1,582名）の5分の1の定足数（317名）を満たし、総会の成立が確認された。

1. 開会の辞 有本真紀副会長

2. 会長挨拶 榎藤敦子会長

第53回大会実行委員への謝辞が述べられ、本期（第25期）は前期からの課題を引き継ぎ、「多様な会員の立場を認め合い、互いの自己実現を支え合う活動の基盤を整えて、学会として持続可能性を点検する」ことを重視し、充実した活動が継続できていることが報告された。また、2022・2023年度役員及び各委員の紹介がなされた。

3. 議長選出 高見仁志会員（佛教大学）が選出された。

4. 会務報告 齊藤忠彦事務局長

総会資料に基づいて、2021年10月16日～2022年11月5日までの会務報告がなされた。

2021年度	
10月16日、17日	第52回大会・総会（オンライン開催）
12月18日	ニュースレター第86号発行
12月31日	『音楽教育実践ジャーナル』vol.19発行
2月20日	2021年度第4回編集委員会（Web会議）
2月20日	2021年度第4回常任理事会（Web会議）
3月18日	ニュースレター第87号発行
3月26日	第10回ワークショップ
3月31日	『音楽教育学』第51巻第2号発行
3月31日	2021年度会計決算
2022年度	
4月16日	2021年度会計監査会（Web会議）
4月23日	2022年度第1回常任理事・理事会（Web会議）
5月18日	ニュースレター第88号発行（オンライン）
5月22日	2022年度第1回編集委員会（Web会議）
6月15日	第53回大会研究発表・共同企画申込・要旨締切
6月20日	第53回大会研究発表受理通知
7月9日	2022年度第2回常任理事会（Web会議）
8月5日	2022年度第2回編集委員会（Web会議）
8月18日	ニュースレター第89号発行
8月18日、28日	第17回音楽教育ゼミナール
8月31日	『音楽教育学』第52巻第1号発行
8月31日	第53回大会プログラム発送
10月13日	第53回大会参加申込締め切り
10月13日	第53回大会参加費振込締め切り
10月15日	2022年度第3回編集委員会（Web会議）
11月4日	2022年度第3回常任理事会、第2回理事会（Web会議）
11月5-6日	第53回大会・総会（国立音楽大学／オンライン開催）

5. 審議事項

(1) 2021年度会計報告（杉江淑子前会計担当理事）・監査報告（寺田貴雄前会計監事）

2021年度会計報告・監査報告について説明がなされ、承認された。

2021年度会計報告

I 一般会計

収 入		
科 目	予 算	決 算
前年度繰越金	7,266,121	7,266,121
正会員会費※	10,969,000	11,249,000
学生会員会費	12,000	8,000
団体会員会費	40,000	30,000
賛助会員会費	300,000	300,000
学会誌売上金	300,000	269,135
本誌代		222,786
送料収入		46,349
大会参加費	1,200,000	1,428,000
その他	20,000	701,441
大会実行委員会返金		475,724
例会運営費返金		225,663
雑収入		54
※7,000×正会員実数1,567(見込計算)		
計	20,107,121	21,251,697

支 出		
科 目	予 算	決 算
大会運営費	2,280,000	1,852,103
大会実行委員会経費	700,000	700,000
事務局経費	1,380,000	1,028,154
プロジェクト研究	200,000	123,949
学会誌費	2,500,000	2,170,423
音楽教育学発行費	1,650,000	1,453,852
実践ジャーナル発行費	850,000	716,571
ニュースター費	200,000	174,680
例会運営費	640,000	556,807
通信・郵送費	1,250,000	808,086
会議費	20,000	0
旅費・交通費	1,500,000	0
HP管理費	270,000	242,816
事務局費	4,805,000	3,078,258
事務費	450,000	60,348
運営費	1,600,000	1,265,357
人件費	2,700,000	1,703,353
事務局員保険費	55,000	49,200
分担金	280,000	280,000
選挙積立金	250,000	250,000
ゼミナール/ワークショップ基金	150,000	150,000
国際交流基金	500,000	500,000
研究出版基金	500,000	500,000
学会基金	700,000	700,000
予備費	4,262,121	0
小 計	20,107,121	11,263,173
次年度繰越金		9,988,524
計	20,107,121	21,251,697

【その他会計報告】

Ⅱ 研究出版基金 **現在高** **¥3,438,761 (①-②)**

収入	2020年度までの積立金 2021年度積立金 利息	¥2,938,735 ¥500,000 ¥26	¥3,438,761 ①
支出	APSMER関連	¥0	¥0 ②

Ⅲ 学会基金 **現在高** **¥2,263,437 (①-②)**

収入	2020年度までの積立金 2021年度積立金 利息	¥1,619,363 ¥700,000 ¥14	¥2,319,377 ①
支出	HPシステム構築・改良費用 学会賞	¥0 ¥55,940	¥55,940 ②

Ⅳ ゼミナール・ワークショップ基金 **現在高** **¥1,374,951 (①-②)**

収入	2020年度までの積立金 2021年度積立金 利息 ワークショップ返金	¥1,349,642 ¥150,000 ¥12 ¥25,627	¥1,525,281 ①
支出	ワークショップ補助金	¥150,330	¥150,330 ②

Ⅴ 国際交流基金 **現在高** **¥3,781,139 (①-②)**

収入	2020年度までの積立金 2021年度積立金 利息 APSMER大会返金	¥1,447,737 ¥500,000 ¥15 ¥1,894,387	¥3,842,139 ①
支出	韓国学会会長招聘 国際交流促進事業費 APSMER大会関連	¥61,000 ¥0 ¥0	¥61,000 ②

Ⅵ 選挙積立金 **現在高** **¥175,594 (①-②)**

収入	2020年度までの積立金 2021年度積立金 利息	¥438,568 ¥250,000 ¥2	¥688,570 ①
支出	第25期選挙	¥512,976	¥512,976 ②

◎ 2021年度決算を上記の通り報告いたします。

2022年 4月 16日
 会計担当 杉江 淑子 (印省略)
 国府 華子 (印省略)

◎ 上記の通り相違ないことを監査いたしました。

2022年 4月 16日
 会計監事 島崎 篤子 (印省略)
 寺田 貴雄 (印省略)

(2) 2022年度事業計画（齊藤事務局長）及び補正予算（寺田会計担当理事）

2022年度事業計画（案），2022年度補正予算（案）について説明がなされ，承認された。

2022年度	
4月16日	2021年度会計監査会（Web会議）
4月23日	2022年度第1回常任理事・理事会（Web会議）
5月18日	ニュースレター第88号発行（オンライン）
5月22日	2022年度第1回編集委員会（Web会議）
6月15日	第53回大会研究発表・共同企画申込・要旨締切
6月20日	第53回大会研究発表受理通知
7月9日	2022年度第2回常任理事会（Web会議）
8月5日	2022年度第2回編集委員会（Web会議）
8月18日	ニュースレター第89号発行
8月18日，28日	第17回音楽教育ゼミナール
8月31日	『音楽教育学』第52巻第1号発行
8月31日	第53回大会プログラム発送
10月13日	第53回大会参加申込締め切り
10月13日	第53回大会参加費振込締め切り
10月15日	2022年度第3回編集委員会（Web会議）
11月4日	2022年度第3回常任理事会，第2回理事会（Web会議）
11月5-6日	第53回大会・総会（国立音楽大学／オンライン開催）
12月下旬	ニュースレター第90号発行（オンライン）
12月下旬	『音楽教育実践ジャーナル』vol.20発行
2023年	
2月中旬	2022年度第4回常任理事会
2月中旬	2022年度第4回編集委員会
2月18日	日韓音楽教育実践交流会（オンライン開催）
3月下旬	ニュースレター第91号発行
3月下旬	『音楽教育学』第52巻第2号発行
3月末日	2022年度会計決算

2022年度 補正予算

I 一般会計

収 入		支 出	
科 目		科 目	
前年度繰越見込金	9,988,524	大会運営費	2,280,000
正会員会費※1	11,074,000	大会実行委員会経費	700,000
	7,000×正会員数1,582※2	事務局経費	1,380,000
学生会員会費	20,000	フロンティア研究	200,000
団体会員会費	30,000	学会誌費	2,500,000
賛助会員会費	250,000	音楽教育学会経費	1,650,000
学会誌売上金	300,000	実践ジャーナル発行費	850,000
本除付		ニュースレター費	250,000
送料収入		例会運営費	640,000
大会参加費	1,400,000	通信・郵送料	1,250,000
その他	20,000	会議費	20,000
大会実行委員会返金		旅費・交通費	1,000,000
例会運営費返金		HP管理費	348,000
雑収入		事務局費	4,805,000
		事務費	450,000
		人件費	2,700,000
		事務局運営費	1,600,000
		事務局員保険費	55,000
		分担金	280,000
		RILM支援金	50,000
		選挙積立金	550,000
		ゼミナール/ワークショップ基金	300,000
		国際交流基金	300,000
		研究出版基金	700,000
		学会基金	3,000,000
		予備費	4,809,524
計	23,082,524	計	23,082,524

※1 特別会員2名を含む。

※2 11月4日理事会承認後の正会員数。自然退会者抜き。

<2022年度その他会計(案)>

II 研究出版基金	¥4,138,761	①-②
収入		
2021年度までの積立金	¥3,438,761	
2022年度積立金	¥700,000	¥4,138,761 ①
支出		
	¥0	②
III 学会基金	¥4,963,437	①-②
収入		
2021年度までの積立金	¥2,263,437	
2022年度積立金	¥3,000,000	¥5,263,437 ①
支出		
HPシステム構築・改良費	¥200,000	
資料の保存・アーカイブ化 調査費	¥100,000	
学会賞	¥0	¥300,000 ②
IV ゼミナール・ワークショップ基金	¥1,524,951	①-②
収入		
2021年度までの積立金	¥1,374,951	
2022年度積立金	¥300,000	¥1,674,951 ①
支出		
ゼミナール・ワークショップ補助金	¥150,000	¥150,000 ②
V 国際交流基金	¥3,481,139	①-②
収入		
2021年度までの積立金	¥3,781,139	
2022年度積立金	¥300,000	¥4,081,139 ①
支出		
韓国音楽教育学会との交流事業	¥300,000	
国際交流促進事業費	¥300,000	¥600,000 ②
VI 選挙積立金	¥725,594	
収入		
2021年度までの積立金	¥175,594	
2022年度積立金	¥550,000	¥725,594

(3) 選挙の電子化について（齊藤事務局長）

選挙の電子化について、選挙電子化WGで検討された作業イメージ、委託業者、費用、課題等の報告がなされ、2023年度（令和5年度）の会長・理事選挙から電子化されることが承認された。

(4) 「日本音楽教育学会細則」「学会賞審査委員会規定」の一部改正について（木村充子総務担当理事）

「日本音楽教育学会細則」「学会賞審査委員会規定」の新旧対照表に基づき改正内容の説明がなされ、細則・規定の一部改正が承認された。

「日本音楽教育学会細則」新旧対照表

改正	現行
第五章 役員の選挙に関する規則 第16条 会長の被選挙権は、改選の前年度までに通算で10年以上の会員歴を有し、かつその間に理事の経験があり、改選年度の2年前の年度会費納入者が有する。 第21条 理事選挙において、投票できる人数は次の通りとする。 (1) 定数1名の地区においては1名とする。 (2) 定数2名の地区においては2名までとする。 (3) 定数3名以上の地区においては、定数を2で除した数（小数点第1位は切り上げ）までとする。	第五章 役員の選挙に関する規則 第16条 会長の被選挙権は、 <u>連続10年以上</u> の会員歴を有し、理事の経験があり、改選年度の2年前の年度会費納入者が有する。 第21条 理事選挙において、 <u>投票用紙に記入できる人数</u> は次の通りとする。 (1) 定数1名の地区においては1名とする。 (2) 定数2名の地区においては2名までとする。 (3) 定数3名以上の地区においては、定数を2で除した数（小数点第1位は切り上げ）までとする。

「学会賞審査委員会規定」新旧対照表

改正	現行
第3条 委員会は、会員のなかから選ばれた下記7名の委員をもって構成する。 (1) 会長 (2) 当該期間の編集委員会委員長 (3) 編集委員経験者、あるいは理事経験者から、研究分野・研究方法を考慮して会長が指名し理事会の承認を得た委員	第3条 委員会は、会員のなかから選ばれた下記7名の委員をもって構成する。 (1) 会長 (2) 当該期間の編集委員会委員長 (3) <u>編集委員の経験がありかつ常任理事または理事の経験者から、研究分野・研究方法を考慮して会長が指名し理事会の承認を得た5名の委員</u>

(5) 「日本音楽教育学会選挙管理委員会規定」「日本音楽教育学会会長・理事選挙実施要領」の一部改訂について（木村総務担当理事）

「日本音楽教育学会選挙管理委員会規定」「日本音楽教育学会会長・理事選挙実施要領」の新旧対照表に基づき、電子投票への変更に伴う改訂内容の説明がなされ、規定・要領の一部改訂が承認された。

「日本音楽教育学会選挙管理委員会規定」新旧対照表

改正	現行
第1条 本会会則第10条1項、3項および細則第24条にもとづき、選挙管理委員会をおく。 第2条 この委員会は、次の事項を取り扱う。 (1) 会長選挙の管理・運営 (2) 理事選挙の管理・運営 第3条 会長選挙の管理および運営に当たり、次の事項を扱う。 (1) 選挙資格者、被選挙資格者名簿の確定 (2) 会長選挙の公示	第1条 本会会則第10条1項、3項および細則第24条にもとづき、選挙管理委員会をおく。 第2条 この委員会は、次の事項を取り扱う。 (1) 会長選挙の管理・運営 (2) 理事選挙の管理・運営 第3条 会長選挙の管理および運営に当たり、次の事項を扱う。 (1) 選挙資格者、被選挙資格者名簿の確定 (2) 会長選挙の公示

<p>(3) 電子投票システム委託業者の選定および委託内容の確認 (4) 実施要領の確認 (5) 当選者の決定 (6) 当選者に対する当選通知 (7) 確定得票数の理事会への通知（一週間以内） (8) 選挙結果の会員への報告（投票総数、投票率、当選者および次点者の氏名と得票数）</p> <p>第4条 理事選挙の管理および運営に当たり、次の事項を扱う。</p> <p>(1) 選挙資格者、被選挙資格者名簿の確定 (2) 各地区の理事定数の確定（細則第20条参照） (3) 理事選挙の公示 (4) 電子投票システム委託業者の選定および委託内容の確認 (5) 実施要領の確認 (6) 当選者の決定 (7) 当選者に対する当選通知 (8) 確定得票数の理事会への通知（一週間以内） (9) 選挙結果の会員への報告（地区ごとの投票総数、投票率、当選者および次点者の氏名）</p> <p>第5条 選挙管理委員会への委任として、この規定に定めるもののほか、会長・理事選挙実施と当選者確定に必要な事項は、選挙管理委員会が決定する。</p> <p>第6条 この委員会は、現理事を除く会員の中から会長委嘱による5名の委員によって構成する。ただし、選挙管理委員が役員に就任した場合は、直ちに委員を辞するものとする。なお、欠員者については、役員でない者をもって補い、その任期は前任者の残任期間とする。</p> <p>第7条 委員の任期は2年とする。ただし、再任は妨げない。</p> <p>第8条 委員会に委員長および副委員長各1名を置き、委員の中からそれぞれ互選する。委員長は委員会を招集し、その議長となる。副委員長は委員長を補佐し、必要に応じてその職務を代行する。</p> <p>第9条 委員会は、選挙前に全委員による会議を開き、選挙に関する事務その他について協議決定する。</p> <p>第10条 選挙実施要領は別に定める。</p> <p style="text-align: center;">附 則</p> <p>電子投票が困難な会員による投票に関しては、従前（平成18年10月28日一部改正）の規定によるものとする。 この規定は、2022年11月5日より施行する。</p>	<p>(3) 投票用紙などの様式、実施要領、記載事項等の確認と配布 (4) 開票作業と有効票の決定 (5) 当選者に対する当選通知 (6) 確定得票数の理事会への通知（一週間以内） (7) 選挙結果の会員への報告（投票総数、投票率、当選者および次点者の氏名と得票数）</p> <p>第4条 理事選挙の管理および運営に当たり、次の事項を扱う。</p> <p>(1) 選挙資格者、被選挙資格者名簿の確定 (2) 各地区の理事定数の確定（細則第20条参照）</p> <p>(3) 投票用紙などの様式、実施要領、記載事項等の確認と配布 (4) 開票作業と有効票の決定 (5) 当選者に対する当選通知 (6) 確定得票数の理事会への通知（一週間以内） (7) 選挙結果の会員への報告（地区ごとの投票総数、投票率、当選者および次点者の氏名）</p> <p>第5条 選挙管理委員会への委任として、この規定に定めるもののほか、会長・理事選挙実施と当選者確定に必要な事項は、選挙管理委員会が決定する。</p> <p>第6条 この委員会は、現理事を除く会員の中から会長委嘱による5名の委員によって構成する。ただし、選挙管理委員が役員に就任した場合は、直ちに委員を辞するものとする。なお、欠員者については、役員でない者をもって補い、その任期は前任者の残任期間とする。</p> <p>第7条 委員の任期は2年とする。ただし、再任は妨げない。</p> <p>第8条 委員会に委員長および副委員長各1名を置き、委員の中からそれぞれ互選する。委員長は委員会を招集し、その議長となる。副委員長は委員長を補佐し、必要に応じてその職務を代行する。</p> <p>第9条 委員会は、選挙前に全委員による会議を開き、選挙に関する事務その他について協議決定する。</p> <p>第10条 選挙実施要領は別に定める。</p> <p style="text-align: center;">附 則</p> <p>この規定は、平成18年10月28日から施行する。</p>
--	--

※通常 HP 上では最新版に更新されるが、附則の記載に対応するため「従前の規定」も HP 上に残しておくこととする。

「日本音楽教育学会選挙・理事選挙実施要領」新旧対照表

改正	現行
<p>I 会長選挙</p> <p>1 選挙資格者・被選挙資格者名簿の確定は、改選前年度の5月末日に行う。（細則第15・16条参照）</p> <p>2 選挙資格者に対する「電子投票用パスワード」の通知は、郵送による。</p> <p>3 投票は電子システムによるものとし、選挙資格者は、電子投票のためのウェブサイト上に表示される「被選挙資格者名簿」の中から会長候補者を選び投票を行う。</p> <p>4 委員会は、電子投票のためのウェブサイト上に次のa) b) c) 等を記載した「日本音楽教育学会会長選挙公報」を提示しなければならない。</p> <p>a) 被選挙資格者名簿（五十音順） b) 投票期限 c) その他投票上の注意事項</p> <p>5 会長選挙の手続き</p> <p>(1) 会長選挙は単記無記名の電子投票とする。</p> <p>(2) 得票順1位の者を当選者とする。</p> <p>(3) 得票同数の時は、当該者間の抽選により決定する。</p> <p>(4) 当選者は、原則として会長を辞任することはできない。ただし、特別な事情がある場合は、理事会へその理由を述べ、了承を得て辞退することができる。</p> <p>(5) 辞退者が生じた場合、次点者を繰り上げて当選者を確定する。</p> <p>II 理事選挙</p> <p>1 選挙資格者・被選挙資格者名簿の確定は、改選前年度の5月末日に行う。（細則第15条・第17条）</p> <p>2 選挙資格者に対する「電子投票用パスワード」の通知は、郵送による。</p>	<p>I 会長選挙</p> <p>1 選挙資格者・被選挙資格者名簿の確定は、改選前年度の5月末日に行う。（細則第15・16条参照）</p> <p>2 選挙資格者に対する投票用紙などの配布は、郵送による。</p> <p>3 投票は郵送とし、事故防止のため二重封筒とする。「日本音楽教育学会会長選挙投票用紙」に、各位が会長候補者氏名を記入の上、まず同封の「投票用封筒」に封入し、さらに「日本音楽教育学会会長選挙投票用紙在中」封筒に封入した後、返送する。</p> <p>4 投票用紙・投票用封筒・返送用封筒は、本会所定のものとする。</p> <p>5 第2項の郵送に際して、委員会は投票用紙などの他、次のa) b) c) 等を記載した「日本音楽教育学会会長選挙公報」を同封しなければならない。</p> <p>a) 被選挙資格者名簿（五十音順） b) 投票期限 c) その他投票上の注意事項</p> <p>6 (1) 会長選挙は単記無記名投票により行う。その際、被選挙資格者以外への投票は無効とする。</p> <p>(2) 得票順1位の獲得者を当選者とする。</p> <p>(3) 得票同数の時は、当該者間の抽選により決定する。</p> <p>(4) 当選者は、原則として会長を辞任することはできない。ただし、特別な事情がある場合は、理事会へその理由を述べ、了承を得て辞退することができる。</p> <p>(5) 辞退者が生じた場合、次点者を繰り上げて当選者を確定する。</p> <p>II 理事選挙</p> <p>1 選挙資格者・被選挙資格者名簿の確定は、改選前年度の5月末日に行う。（細則第15条・第17条）</p> <p>2 選挙資格者に対する投票用紙などの配布は、郵送による。</p>

<p>3 投票は電子システムによるものとし、選挙資格者は、電子投票のためのウェブサイト上に表示される「被選挙資格者名簿」の中から理事候補者を選び投票を行う。</p> <p>4 委員会は、電子投票のためのウェブサイト上に次のa) b) c) d) 等を記載した「日本音楽教育学会役員（地区理事）選挙公報」を提示しなければならない。</p> <p>a) 地区別会員数および理事定数 b) 被選挙資格者名簿 c) 投票期限 d) その他投票上の注意事項</p> <p>5 理事選挙の手続き</p> <p>(1) 理事選挙は無記名の電子投票とする。その際、投票は細則第21条で定められている人数を上限とし、その数に満たない投票も有効とする。</p> <p>(2) 当選者の決定は、得票順とする。</p> <p>(3) 同点者が生じた場合は、選挙管理委員会において抽選により決定する。</p> <p>(4) 理事当選者に会長当選者が含まれている場合は、会長当選者の所属地区の次点者を理事当選者とする。</p> <p>(5) 当選者は、原則として理事を辞退することはできない。ただし、特別な事情がある場合は、会長へその理由を述べ、了承を得て辞退することができる。</p> <p>(6) 辞退者が生じた場合は、得票数の多い順に繰り上げて当選者を確定する。</p> <p style="text-align: center;">附 則</p> <p>電子投票が困難な会員による投票は、従前（2019年10月19日 一部改正）の実施要領によるものとする。 この要領は、2022年11月5日より施行する。</p>	<p>3 投票は郵送とし、事故防止のため二重封筒とする。「日本音楽教育学会理事選挙投票用紙」に、各位が選出したい会員の会員番号と氏名を記入の上、まず封筒の「投票用封筒」に封入し、さらに「日本音楽教育学会理事選挙投票用紙在中」封筒に封入した後、返送する。</p> <p>4 投票用紙および投票用封筒・返封用封筒は、本会所定のものとする。</p> <p>5 第2項の郵送に際して、委員会は投票用紙などの他、次のa) b) c) d) 等を記載した「日本音楽教育学会役員（地区選挙理事）選挙公報」を同封しなければならない。</p> <p>a) 地区別会員数および理事定数 b) 被選挙資格者名簿 c) 投票期限 d) その他投票上の注意事項</p> <p>6 理事選挙の手続き</p> <p>(1) 理事選挙は、正会員による無記名投票とする。その際投票用紙の記名人数に満たない投票も有効とする。</p> <p>(2) 当選者の決定は、得票順とする。</p> <p>(3) 同点者が生じた場合は、選挙管理委員会において抽選により決定する。</p> <p>(4) 理事当選者に会長当選者が含まれている場合は、会長当選者の所属地区の次点者を理事当選者とする。</p> <p>(5) 当選者は、原則として理事を辞退することはできない。ただし、特別な事情がある場合は、会長へその理由を述べ、了承を得て辞退することができる。</p> <p>(6) 辞退者が生じた場合は、得票数の多い順に繰り上げて当選者を確定する。</p> <p style="text-align: center;">附 則</p> <p>この要領は、2019年10月19日より施行する。</p>
--	---

※通常 HP 上では最新版に更新されるが、附則の記載に対応するため「従前の規定」も HP 上に残しておくこととする。

(6) 2023 年度事業計画（齊藤事務局長）

総会資料に基づいて、2023 年度事業計画（案）について説明がなされ、承認された。

<p>2023年</p> <p>4月中旬 4月下旬 4月下旬 5月中旬 6月中旬 6月中旬 7月上旬 7月上旬 7月中旬 8月上旬 8月中旬 8月下旬 8月下旬 9月下旬 10月中旬 10～11月 10～11月 12月 12月 12月下旬 12月下旬</p>	<p>2022年度会計監査会 2023年度第1回常任理事・理事会 2023年度第1回編集委員会 ニュースレター第92号発行（オンライン） 第54回大会研究発表・共同企画申込・要旨締切 第26期会長・理事選挙関係書類発送 第26期会長・理事選挙開票（事務局） 第54回大会研究発表受理通知 2023年度第2回常任理事会 2023年度第2回編集委員会 ニュースレター 第93号発行 『音楽教育学』第53巻第1号発行 第54回大会プログラム発送 第54回大会参加申込・参加費振込締め切り 2023年度第3回編集委員会 2023年度第3回常任理事会・第2回理事会 第54回大会・総会（弘前大学） 会員名簿発送 第11回ワークショップ ニュースレター第94号発行（オンライン） 『音楽教育実践ジャーナル』vol. 21発行</p>
<p>2024年</p> <p>2月中旬 2月中旬 3月下旬 3月下旬 3月末日</p>	<p>2023年度第4回編集委員会 2023年度第4回常任理事会 ニュースレター第95号発行 『音楽教育学』第53巻第2号発行 2023年度会計決算</p>

(7) 2023年度予算（寺田会計担当理事）

2023年度予算（案）について説明がなされ、承認された。

2023年度 予算		2023年度 予算		<2023年度その他会計(案)>	
I 一般会計		II 研究出版基金		III 学会基金	
収入	支出	収入	支出	収入	支出
前年度繰越見込金	4,809,524	大会運営費	2,280,000	2022年度までの積立金	¥4,138,761
正会員会費※1	11,074,000	大会実行委員会経費	700,000	2023年度積立金	¥200,000
学生会員会費	20,000	事務局経費	1,380,000	支出	¥0
回体会員会費	30,000	フロンティア研究	200,000	IV ゼミナール・ワークショップ基金	¥1,524,951
賛助会員会費	250,000	学会誌費	2,500,000	収入	
学会誌売上金	300,000	産業教育学会経費	1,650,000	2022年度までの積立金	¥4,963,437
本誌代		実践ジャーナル発行費	850,000	2023年度積立金	¥500,000
送料収入		ニュースレター費	250,000	支出	
大会参加費	1,400,000	例会運営費	640,000	HPシステム構築・改良費用	¥100,000
その他	20,000	通信・郵送料	1,250,000	名簿作成費	¥750,000
大会実行委員会運営金		会議費	20,000	資料の保存・アーカイブ化 調査費	¥100,000
例会運営費運営金		旅費・交通費	1,000,000	学会賞	¥50,000
雑収入		HP管理費	348,000	V 国際交流基金	¥3,481,139
計	17,903,524	事務局費	4,805,000	収入	
		事務費	450,000	2022年度までの積立金	¥1,524,951
		人件費	2,700,000	2023年度積立金	¥200,000
		事務局運営費	1,600,000	支出	
		事務局員保険費	55,000	ゼミナール・ワークショップ補助金	¥200,000
		分担金	280,000	VI 選挙積立金	¥165,594
		RILM支援金	50,000	収入	
		選挙積立金	300,000	2022年度までの積立金	¥725,594
		ゼミナール・ワークショップ基金	200,000	2023年度積立金	¥300,000
		国際交流基金	200,000	支出	
		研究出版基金	200,000	韓国音楽教育学会との交流事業	¥100,000
		学会基金	500,000	国際交流促進事業費	¥100,000
		予備費	3,080,524	VII 選挙積立金	¥860,000
				収入	
				2022年度までの積立金	¥725,594
				2023年度積立金	¥300,000
				支出	
				第26期選挙	¥860,000

※1 特別会員2名を含む。

※2 11月4日理事会承認後の正会員数。自然退会者抜き。

(8) 第54回大会について（榎藤会長）

第54回大会（2023年度）について、弘前大学での開催が提案され、承認された。会場校の今田匡彦会員より、2023年10月14日（土）・15日（日）に対面実施を予定していることが報告された。

(9) 第55回大会候補地について（榎藤会長）

関東地区で開催予定であることが確認され、承認された。

6. 報告事項

(1) 各委員会等から

・編集委員会（今田委員長）

10月15日に開催された第3回編集委員会について、『音楽教育学』第52巻第2号と『音楽教育実践ジャーナル』vol.20の編集の進捗状況が報告された。また、『音楽教育実践ジャーナル』vol.21（通巻第34号）の特集テーマ「ウェルビーイングと音楽教育」と投稿締切が2023年2月15日であることが報告された。

・国際交流委員会 「日韓音楽教育実践交流会」（菅裕委員長）

2023年2月18日（土）にオンライン開催される日韓音楽教育実践交流会「ICTとこれからの音楽教育」の実施計画、日韓の各4名から幼児教育、小学校、中学校・高等学校、大学の各実践報告が行われる予定であることが報告された。

・広報委員会（笹野恵理子委員長）

ニュースレター第90号（12月18日にオンライン発行）の編集作業が進められていることが報

告された。さらに、「会員の新聞・近刊等紹介」その他、会員からのニュースレターへの投稿が呼びかけられた。

・**選挙管理委員会**（山本幸正委員長）

2023年度第26期会長・理事選挙スケジュールが提示された。

・**音楽文献目録委員会**（長野麻子委員）

RILM 支援金（RILM オンラインデータ遡及入力推進のための募金）について、本学会から年間5万円を4年間寄付することが報告された。

・**教科教育学コンソーシアム**（伊藤真教科教育学コンソーシアム理事）

「教科教育学コンソーシアム」において、ジャーナル発行のための「教科教育学コンソーシアムジャーナル」編集規程、投稿・執筆要項が作成されたこと、研究推進に関して「教科教育学のターミノロジーとメソドロジー」について研究が進められ、2022年度のシンポジウムでは「教科教育学ターミノロジー」をテーマに発表が行われる予定であることが報告された。

・**資料の保存・アーカイブWG**（杉江淑子企画担当理事）

WGによる検討結果の中間報告がなされた。過去の調査資料のうち、個人の回答者が特定されない統計的な質問紙調査の保存に際しては、個票データをアーカイブ化することが望ましいことが報告された。また、調査実施後の資料やデータの保存までを視野に入れることが望ましいこと、資料の保存の原則を検討すること、長期的かつ安全に保存・公開・活用するための方法を検討すること、1987年調査のアーカイブ化のための予算上の措置について説明がなされた。

(2) **第11回ワークショップ**について（石上則子企画担当理事）

第11回ワークショップ（義太夫のワークショップ）が2023年12月2日（土）に対面で行われる予定であることが報告された（会場は未定）。

7. 議長解任

8. 閉会の辞 有本真紀副会長

2. 2022年度 日本音楽教育学会 第3回常任理事会

日時：2022年11月4日（金） 13:00～14:30

場所：オンライン開催（Zoom）

出席者：権藤、有本、齊藤、今川、今田、木村、笹野（記録）、嶋田、菅 裕、杉江、寺田

第2回理事会と重複しない審議事項・報告事項を中心に審議・報告が行われた。

【審議事項】

1. 選挙の電子化について（齊藤）

選挙電子化WGで3回の会議をもち、2023年度から電子化の運用が可能であるとの見通しがもてたこと、システム構築業者と圧着ハガキ印刷業者への委託が必要となるため、予算は従前よりやや増額となる見込みだが、投票率アップ、事務局と選挙管理委員の業務軽減等のメリットから、

電子投票へ移行したいとの説明があり、承認された。電子投票が困難な会員は個別対応とするため、従前のように紙媒体による投票ができるように配慮することもあわせて報告され、承認された。

2. 「日本音楽教育学会細則」「学会賞審査委員会規定」の一部改正について（木村・嶋田）

資料に基づき改正内容の説明がなされ、「日本音楽教育学会細則」「学会賞審査委員会規定」の一部改正が承認された。

3. 「日本音楽教育学会選挙管理委員会規定」「日本音楽教育学会会長・理事選挙実施要領」の一部改訂について（木村・嶋田）

資料に基づき、選挙の電子化に伴う改正の内容について説明がなされ、「日本音楽教育学会選挙管理委員会規定」「日本音楽教育学会会長・理事選挙実施要領」の一部改訂が承認された。電子投票が困難な会員による投票に関しては、従前の実施要領を適用することが説明され、承認された。

4. 2022年度補正予算、2023年度予算について（寺田・國府）

資料に基づき、2022年度補正予算（案）、2023年度予算（案）について説明がなされ、承認された。RILM委員会の遡及入力作業への寄付として5万円の支援金（4年間）が計上されたこと、選挙電子化に伴い選挙積立金を25万円から30万円とすることなどについて説明があった。また2023年度は名簿作成の費用が計上されていることが説明され、承認された。

5. 第54回大会について（榎藤）

第54回大会について、弘前大学にて開催予定であることが報告され、承認された。今田常任理事より、2023年10月14日（土）・15日（日）（仮）の日程案が示され、現在のところ対面開催の予定であることが報告された。

6. 第55回大会候補地について（榎藤）

関東地区で開催する予定であることが報告され、承認された。

7. 総会議題の確認（齊藤）

総会議題を確認し、承認された。

<次回会議の予定>

第4回常任理事会 2023年2月12日（日）10:00～12:00 オンライン（Zoom）

.....

3. 2022年度 日本音楽教育学会 第2回理事会

日 時：2022年11月4日（金）14:30～16:00

場 所：オンライン開催（Zoom）

出席者：榎藤、有本、齊藤、今川、今田、木村、笹野、嶋田、菅裕、杉江、寺田、石上、

伊藤（記録），小畑，國府，津田，三村，山下

【会務報告】〈2022年7月9日以降〉（齊藤）

- 7月9日 2022年度第2回常任理事会（Web会議）
- 8月5日 2022年度第2回編集委員会（Web会議）
- 8月18日 ニュースレター第89号発行
- 8月18, 28日 第17回音楽教育ゼミナール開催（オンライン開催）
- 8月31日 『音楽教育学』第52巻第1号・第53回大会プログラム 発行・発送
- 10月13日 第53回大会参加申込・参加費振込締め切り
- 10月15日 2022年度第3回編集委員会（Web会議）
- 11月4日 2022年度第3回常任理事会，第2回理事会（Web会議）

【メール審議の報告】〈2022年7月9日以降〉（齊藤）

- ・2022年4月23日以降の正会員新入会33名，自然退会者の再入会2名，学生会員新入会1名，正会員申出退会8名について承認された。
- ・7月8日現在の会員数実数を反映させた2022年度補正予算（案），及び2023年度予算（案）が承認された。
- ・日韓音楽教育実践交流会（2023年2月18日オンライン開催）の実施計画案が承認された。
- ・選挙電子化に向けての提案に関わる意見聴取が10月24日まで行われることが報告された。
- ・資料の保存・アーカイブWGの中間報告に関わる意見聴取が11月1日まで行われることが報告された。

【審議事項】

1. 新入会員及び退会者について（齊藤）

7月9日以降の正会員新入会22名，自然退会者の再入会1名，学生会員新入会1名，正会員申出退会4名について，審議の結果，承認した。

（2022年11月3日現在 正会員1,582名 学生会員5名 名誉会員2名 特別会員2名）

[資料] 新入会員・再入会員・退会者について

- ◆正会員 新入会員，再入会員（2022年7月9日常任理事会以降）

個人情報保護のため削除しました。

正会員 新入会 22 名, 再入会 1 名

◆学正会員 (2022 年 7 月 9 日常任理事会以降)

個人情報保護のため削除しました。

学生会員 新入会 1 名

2. 選挙の電子化について (齊藤)

選挙電子化 WG から作業イメージ, 委託業者, 費用, 課題等の報告がなされ, 2023 年度 (令和 5 年度) の会長選挙・理事選挙から電子化されることが承認された。

3. 「日本音楽教育学会細則」「学会賞審査委員会規定」の一部改正について (木村・嶋田)

新旧対照表に基づき改正内容の説明がなされ, 標記細則・規定の一部改正が承認された。

4. 「日本音楽教育学会選挙管理委員会規定」「日本音楽教育学会会長・理事選挙実施要領」の一部改訂について (木村・嶋田)

新旧対照表に基づき, 電子投票への変更に伴う改訂内容の説明がなされ, 標記規定・要領の一部改訂が承認された。

5. 2022 年度補正予算, 2023 年度予算について (寺田・國府)

2022 年度補正予算 (案), 及び 2023 年度予算 (案) について説明がなされ, 承認された。

6. 第 54 回大会について (榎藤)

弘前大学で開催予定であることが報告され, 承認された。今田常任理事より, 2023 年 10 月 14 日 (土)・15 日 (日) に対面実施で調整中であることが報告された。

7. 第55回大会候補地について (権藤)

関東地区で開催予定であることが確認・承認された。

8. 総会議題の確認 (齊藤)

総会資料に基づき、総会議題を確認し、承認された。

9. 名誉会員の辞退について (権藤)

山本文茂会員から、名誉会員の辞退願いが提出されたことが報告され、承認された。

【報告事項】

1. 第17回音楽教育ゼミナール報告 (今川・杉江)

ゼミナール1「ELANを用いたコミュニケーション分析」(2022年8月18日)・ゼミナール2「調査・統計—データを集める・データを使いこなす—」(2022年8月28日)がオンラインで開催され、全体で45名の参加があったことが報告された。

2. 第10回(2021年度)ワークショップ報告, 第11回(2023年度)ワークショップについて (石上)

2022年3月26日(土)に開催された第10回ワークショップに、対面26名、動画配信25名が参加したことが報告された。あわせて会計報告がなされた。また、第11回ワークショップが2023年12月2日(土)に「文楽(人形浄瑠璃)に親しむ」(仮)と題して行われる予定である(会場は未定)。

第10回ワークショップ収支報告

【収入の部】

項目	金額	備考
学会からの準備金	150,000	
参加費	64,000	会員(対面11名, 動画配信14名) 非会員(対面19名, 動画配信7名)
計	214,000	

【支出の部】

項目	金額	備考
会場費	56,930	振込手数料込
楽器運搬費	30,000	
講師及び講習補助者謝金	90,000	
昼食費	10,450	
その他雑費	993	除菌スプレー等
学会への返金	25,627	
計	214,000	

3. 地区担当理事の変更 (権藤)

中国四国地区担当理事について、三村真弓会員から伊藤真会員に変更があったことが報告された。

4. 第53回大会について (津田)

直前に補助学生の変更が生じ、オンライン実施の体制を再整備する必要が出てきたが、実行委員全員で最終調整をしながら大会当日を迎える状況であることが報告された。

5. 各委員会等報告

(1) 編集委員会 (今田)

第3回編集委員会が10月15日にTeamsによって開催された。『音楽教育学』13本、『音楽教育実践ジャーナル』1本の投稿原稿について審議し、研究論文1本、研究報告1本が掲載可、研究報告1本、論考1本、研究動向1本が修正再査読となった。2022年12月発刊予定の『音楽教育実践ジャーナル』vol.20(通巻第33号)は既に入稿済、2023年3月発刊予定の『音楽教育学』第52巻第2号は、研究論文1本、研究動向1本、研究報告2本、書評1本が掲載予定で、それぞれ現在作業を進めていることが報告された。また、『音楽教育実践ジャーナル』vol.21(通巻第34号)の特集テーマ「ウェルビーイングと音楽教育」の主旨について再度説明があり、投稿締切が2023年2月15日であることが確認された。尚、第4回編集会議は2月中旬に開催予定となっている。

(2) 国際交流委員会 / 「日韓音楽教育実践交流会」について (菅 裕)

2023年2月18日(土)にオンライン開催される日韓音楽教育実践交流会「ICTとこれからの音楽教育」の実施計画が報告された。日韓の双方から幼児教育、小学校、中学校・高等学校、大学の各実践報告が行われる予定である。それに先立ち、8月に開催された韓国音楽教育学会大会に金奎道国際交流副委員長が出席し、関係者に挨拶したことも報告された。

(3) 広報委員会 (笹野)

ニューズレター第90号(12月18日にオンライン発行)の編集作業が進められていること、11月末をめぐりに各記事の原稿を送付されたいこと、また第91号には「会員の声」に関東地区、及び北陸地区から執筆されたいことが報告された。

(4) 選挙管理委員会 (山本→齊藤)

2023年度第26期会長・理事選挙スケジュールが提示された。

(5) 音楽文献目録委員会 (長野→齊藤)

遡及入力推進のための募金について、年間分担金と同額の20万円を4年間に分けて、各年5万円ずつ寄付すること、この寄付に伴って『音楽教育学』の論文等を国際音楽文献要旨目録に優先的に掲載していただくことが報告された。

(6) 教科教育学コンソーシアム (伊藤)

編集委員会では「教科教育学コンソーシアムジャーナル編集規程」投稿・執筆要項が作成されたこと、研究推進委員会では「教科教育学のターミノロジーとメソドロロジー」について研究が進められ、2022年度のシンポジウムでは「教科教育学ターミノロジー」をテーマに発表が行われる予定であることが報告された。

(7) 資料の保存・アーカイブ化WG (杉江)

WGによる検討結果の中間報告がなされた。特に、質問紙調査の個票データ(ローデータ)は二次分析につながり、研究上、新たな価値が産出される可能性があるため、過去の調査資料のうち、個々の回答者が特定されない統計的な質問紙調査の保存に際しては個票データをアーカイブ化することが望ましいことが報告された。また、今後の方針として、調査実施後の資料やデータの保存までを視野に入れることが望ましいこと、資料の保存の原則を検討すること、長期的かつ安全に保存・公開・活用するための方法を検討すること(東京大学データアーカイブ研究センターとの連携やデータ寄託等)、1987年調査のアーカイブ化のための予算上の措置について説明がなされた。

6. 事務局より

第53回大会が首尾よく開催できるように祈念した。

7 事務局より

事務局長 齊藤 忠彦

1. 年度会費納入のお願い

年度会費(7,000円)未納の方は至急お支払いください。会費未納の場合、大会での発表、送付物の受け取り、論文投稿などに支障が発生します。2年間会費を滞納すると自然退会になります。会費納入後、約2週間で事務局より年会費振込の確認メールが自動送信されます。メールが届かない場合は事務局までご連絡ください。

2. 会員情報(所属先・住所など)の変更について

学会からの送付物が「宛先不明」にて戻ってきてしまうことが少なからず生じています。所属先・住所等に変更があった場合は、速やかに修正登録をお願いします。会員情報の変更は事務局では受け付けておりません。学会HP「会員個人専用ページ(「マイページ」)」からご自身で変更していただきますようお願いいたします。メールアドレスが未登録の方は「マイページ」に入ることができませんので、事務局まで至急メールアドレスをご連絡ください。

【編集後記】

会員の皆様から寄せていただいた原稿を拝読しながら、それぞれのお立場から音楽教育を実践・研究され、その成果をグローバルな視点から共有できることの意味とありがたさを改めて感じ取っています。

第53回東京大会のテーマ「対話する音楽教育—ダイバーシティ&インクルージョンに向けて—」は、私たちの社会と音楽教育の今、そして未来を展望するための課題に向き合わせてくれました。グローバルズムの名の下、世界と私たちは、国、民族、イデオロギーなど様々な違い(ダイバーシティ)を“inter”な関係でつなぎ、共生・共創に向かって進んで行かなければなりません。現実はなかなか厳しく、だからこそ、音楽の営みや役割、教育活動の意義を問い直す機会が与えられているように思います。

ニュースレター90号の発刊にあたり、多くの会員の皆様にご協力いただき、皆様のお声を響き合わせる場ができましたことに感謝申し上げます。引き続き、一人でも多くの会員のフレッシュなお声をニュースとして届けていただきますよう、編集委員一同お待ちしております。(中嶋 俊夫)

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206 Tel. & Fax. : 042-381-3562

E-mail : (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

郵便振替口座：00110-6-79672, 日本音楽教育学会

他金融機関からの振込：ゆうちょ銀行, 〇一九(ゼロイチキョウ)店, 当座0079672, 日本音楽教育学会

事務局員：宇田川・亀山・徳山・若尾

※新型コロナウイルスの影響に鑑み、事務局開局の状況が不規則です。ご用件はEメールにてお願いいたします。